

古代漢語における指示人称表現研究

論文審査の結果の要旨

本論文は、古代漢語における指示人称表現に注目し、研究対象となる資料や語彙を慎重に検討した上で、実際の用例を分析しつつ、実証的体系的に研究したものである。

第1章では、古代漢語の時期区分と研究対象資料について検討する。論文の提出者は、商周一古代-近世漢語の大枠を示した上で、本論文においては、春秋戦国期の『論語』から唐初期の『遊仙窟』に至る言語資料を主たる研究対象とすることを述べる。

第2章は、主に『孟子』における指示詞について分析する。該書は成書時期と版本に比較的問題が少なく、問答体による指示対象が特定しやすい特徴を持つからである。論文の提出者は、まず『孟子』における近称「此」と遠称「彼」、および中称「是」の用法を検証し、次に繫詞「是」の展開について検討する。更には、遠称「彼」が後に他称詞として用いられる経過についても、日本語・朝鮮語における用法に言及しつつ論述する。

第3章は本論の中核をなす古代漢語における人称表現について論じる。論文の提出者は、甲骨、西周期から『尚書』においては、一人称として主に「余」「予」「朕」を用い、自己の属する集団に言及して「我」を用いること、『論語』『孟子』『左伝』では「吾」「我」「予」を用い、また『荀子』『韓非子』以降は「吾」「我」のみを用いることを指摘する。次に『楚辞』の「離騷」や「九章」における人称の相違、また北方-南方方言による人称の相違についても明らかにする。最後に『遊仙窟』における第一人称の「我」「余」「僕」、第二人称の「君」、第三人称の「渠」「他」等の人称表現の用例についても具体的に検討する。

第4章では、古代漢語の次に位置する早期白話における指示人称表現について、「敦煌変文』『大唐三蔵取経詩話』『三国志平話』を対象にして分析する。主に検討した語彙は疑問代名詞の「甚處」「那裡」、近称指示詞の「這」「此」、また人称詞「我」「你」「他」等である。論文の提出者は、これらの用法が現代における用法に直結していることを明らかにする。

以上が本論文の要旨である。巻末に示す122篇の参考論文は、この方面の研究が学界の普遍的な関心事である証拠であるが、一方、論文の提出者が指摘する通り、先行する確かな学問体系がまだ十分でないことを示している。

こうした中であって、本論文の提出者が古代漢語における指示人称研究に特定し、研究対象となる資料や語彙を慎重に選定した上で、個別の用例について実証的に研究を進めたことは評価するに値する。後人の変改を経ない直接資料たる出土文献を含めたその他資料についての更に踏み込んだ検討や、分析した語彙データを基にした理論構築、更には日本語や朝鮮語といった関連言語との本格的な比較検討等、今後の課題は残るが、それらはいずれも、論文の提出者が本論文において研究した問題が言語学的に重要であり、普遍的な価値を有するが故に生じるものであると考えられる。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに十分な能力を有するものであることを認める。